

ナマコ

水族館へ行こう!

京都大学白浜水族館



水族館でナマコの水槽をのぞく来館者間でしばしば話題になるのが、どっちの端が口で、どっちの端が肛門(こうもん)かということである。明確な頭や目があったり、ある程度活発に運動したりする生き物であれば、体の前後が分かり、口と肛門がどのあたりにあるのか推測できる。しかし、ナ

どっちが口でどっちが肛門?

マコはわれ関せずといった様子で、水槽の底に転がるか壁に張り付いているだけである。とはいえもちろんナマコにも前後の区別はある。ナマコは砂を食べ、その表面に付く微生物

や有機物だけを消化して、きれいになった砂を排せつする、いわば磯の掃除屋さんである。注意深く見ていると、砂を取り込む口と、ふんを出す肛門とが区別できるが長時間の観察が必要だ。口の周りには触手があり、外に出ている時には簡単に見分けられるが、ちょっとした刺激ですぐに引っ込むし、はなから小さくて自立たない種も多い。

のある前方ということになる。日本では、ナマコは古来より食用として利用されてきた。現存する日本最古の歴史書「古事記」においても、クラゲやカキとともに、その名前が見られる。ただその中で扱いはちょっとかわいそつである。天孫降臨の際、海の生き物が集められ服従を誓わされた。その時ナマコだけが黙っていたため、アメノウ

では確実簡単に区別する方法を紹介する。それには体の両端を指でつまんでみるとよい。ナマコの咽頭(いんとつ)、人でいえばのど仏にあたる部分に、石灰環と呼ばれる固いリング状の構造がある。石灰環のコリコリとした手触りのある方が、口と肛門が分かりにくいナマコ類。手前に少し盛り上がった砂がふん(水槽番号403)

ズメという神様が怒って、ナマコの口を小刀で裂いてしまった。同じ棘皮(きょくひ)動物でも、ウニのようにとげで武装しているわけでもなく、ヒトデのような食欲(どんよく)な捕食者というわけでもない。根っからの平和主義者のナマコにこのような仕打ちをするとは、とんだ神様もいたものである。

(京都大学講師)